

# 101. 地域リハビリテーション活動における理学療法士の役割 —対象者の補装具使用状況を通じて—

【キーワード】

補装具・アンケート調査・在宅指導

長崎大学医療技術短期大学部

井口 茂・中野 裕之・大島 吉英  
鶴崎 俊哉

長崎大学医学部附属病院

大城 昌平

はじめに)

地域リハビリテーション活動での理学療法の実践はホームプログラムの指導・ADL指導など身体機能面に対する援助から医療・保健・福祉と多岐にわたっている。その中で補装具の適合判定、使用方法の指導は理学療法士の大きな役割であろう。

そこで今回、われわれは機能訓練事業等で指導した対象者の補装具の種類とその使用状況を調査し、在宅における補装具使用の要因について検討を加えた。また、その結果から地域での理学療法士の役割についても考察したので報告する。

対象と方法)

調査期間：昭和61年度より3か年

対象：吉井町・小佐々町・松浦市の総計103名  
中、補装具を所有している者47名。

調査方法：郵送によるアンケート方式  
担当保健婦の協力により本人または家族に確認。

結果及び考察)

回答数は47名中、46名(97.8%)でその内訳は、男性34名、女性12名で年齢は52~85才で平均67.3才であった。

## 1. 対象者の疾患分類と自立度

疾患分類ではCVAが半数を越え、脊髄損傷、RA等の整形外科疾患が8.6%でその他や不明のものが28.4%であった。

全体的自立度では屋外生活群・屋内生活群がほとんどであった。

## 2. 処方補装具の内訳

処方されていた補装具は、延べ79件であった。処方補装具の種類はT字・F字杖または、松葉杖等の杖類が39件と最も多く、次いで短下肢装具(以下、AFOと略)16件、車椅子15件、長下肢装具、その他5件であった。

AFOの種類は、プラスチック製靴べら式AFOがAFO全体の81.2%を占めていた。また車椅子は、スタンダードタイプが多く処方されていた。自立度別では屋内生活群14名において28補装具(35.4%)、屋外生活群31名中49補装具(42.9%)であった。

## 3. 補装具使用の有無

対象者46名、79補装具の使用状況は、使用有りが62装具(78.5%)でその種類は杖、車椅子、AFOが多かった。また使用無しは17装具21.5%であった。疾患別においてはCVA29名、52補装具(62.8%)中、使用無しは5補装具であり、ほとんどが使用有りであった。自立度別の使用状況は、屋内生活群28装具中では、使用有り16装具57.1%、使用無し12装具42.9%に対し屋外生活群49装具では使用有り44装具89.8%、使用無し5装具10.2%であった。

## 4. 病院処方と在宅処方の比較

病院処方、34補装具43%と最も多く、在宅処方28補装具35.5%、自費購入・その他17補装具21.5%であった。そのうち推進班の指導したものは10補装具であった。また、使用無しの17補装具の内、在宅処方によるもの11補装具、病院にて処方5補装具、自費購入1補装具であった。

## 6. 補装具使用の感想

全対象者46名の補装具使用の感想は、歩行しやすくなった、行動範囲が広がった等移動能力の改善を挙げた者が29名63%と多く、逆に歩行しにくい、痛みがひどくなった等が5名10.9%、また変化無しが11名23.9%であった。

今回の調査において、全体の78.5%に補装具の使用があり比較的高い使用状況であった。その内訳は、歩行能力に関する補装具が多く使用されており、これは対象者の自立度が高いこと、また対象疾患に脳卒中片麻痺患者が多く、病院より継続して補装具を使用しているためと思われた。しかし、自立度別の使用状況では屋外生活群はほとんど使用しているのに対し、屋内生活群では使用無しの補装具が40%と多かった。その理由として装具不適合を挙げた者が多く、自立度の低下に伴い在宅での補装具使用の困難性が伺われた。また、在宅処方11装具が使用無しであり、在宅での処方における適合判定を再検討する必要が示唆された。

以上のことより地域リハビリテーション活動の中の理学療法士の大きな役割である補装具の適合判定、使用方法の指導は、①医療からの継続したフォロー、②在宅生活に適合した補装具の機能性、③在宅での補装具適合判定方法、④補装具使用者・家族への教育、⑤故障時の対処などが考慮されなければならない、これらの一貫した指導により補装具の有効な使用がなされるであろう。